



# 魁-さきがけ



テープ起こし屋への助走

taorie2013

# さきがけ

---

## 魁-さきがけ

西瓜が、ぱっくり口を開けて転がっていた。

「やあ」と一声かけて通り過ぎる。果肉がきれいだったから、きっと今朝がた死んだんだろう。

ここは青果市場。新しいものだけが歓迎される。死んだ西瓜にふりむく人はいない。

そんなのは、セリが終わった頃に出勤する私くらい。

だが、それもあと数年すれば見飽きた風景になって、

他の人同様、転がった果物を見ても、「やあ」とも言わずに通り過ぎるようになるのだろう。

事務所に向かう道すがら、流れてくる匂いは、

この先の方でプリンスメロンの一隊が潰れていると教えてくれる。本当の潰滅状態、強烈な匂い。

無傷な果物はおとなしい。整然と積まれ、幾個あろうとも、これほどまでに強烈な匂いは出さない。

今、私の前に漂うのは、傷つき、打ち捨てられたものだけが出す本当の匂いだ。

「バカ」と落書きのあるエレベーターに乗って4階の事務所に着くと、8時ちょうど。

まだ誰も来ていない。

室内には事務員が20人は座れるカウンターと椅子。

が、出勤してくるのは6人だけ。

少し前までは満席だったというけれど、私が入ったときには、

その差し引き14人分の仕事を、もっぱらオフィス・コンピュータ1台が楽にこなしていた。

職員の平均年齢は53才。電卓をたたいて驚いた。

24の私がひとり入ったくらいでどうなるものでもない。

焼け石に水だ。

新聞の『事務員募集』という求人広告を見て、のこのこと面接に行ったのが、

時間的に普通の会社でいうお昼休みだったので、ガランとした様もさして気にならず、

まさかそのとき目に入った人間が全員だとは思わなかった。

そういった空気を反映してか、窓から見える景色は煤け、差し込む光はいつも西日だった。

場所柄、朝8時に出勤して、午後3時頃には帰ってしまうのだから、

本当は西日を浴びている時間などほとんどないのだが、思い出すのはいつも西日だ。

とりあえず新鮮なのは果物と野菜だけ。

それが市場本来の機能だから、それでいいといえばそれまでだが、やり切れない。

面々が面々だけに、青物以外の話といえば、戦前・戦中・敗戦直後をぐるぐるまわっているか、

さもなくばもっぱら子供の自慢。

## さきがけ

---

戦後のどさくさに、市場のあちこちに散らばっている野菜の切れっぱしを集めて売りさばき、ひと財産作った八百屋の話などは、本人が年中顔を出すだけにリアリティがあっておもしろかった。でも子供の自慢になると辟易した。親自体に興味がないのに、見たこともない子どもの話なんぞにどうしてつき合えよう。短時間ならいい。でも私の場合は長時間、毎日だ。

例えばこんな-----

「息子がね、外資系の企業に入ったの」  
「すごいじゃない、外資なんて。なかなか入れないでしょう。」  
それに、実力次第でどんどん上へいけるっていうじゃない。よかったわねー」  
「そうなのっ、そうなのよ！」  
「で、どんな会社？」  
「食品関係」  
「どこ？」  
「マクドナルド」  
「あらー、安定企業じゃない」

頭が痛い！

確かにマクドナルドは外資系だ。安定もしているだろう。でも（マクドナルドには悪いが）普通の神経の持ち主なら、そんな言い方はしない。うれしそうに相槌を打つ方も打つ方だ。いやでも聞こえてくる会話の進行状況から推し量れば、時給600円のアルバイトじゃないか。

それなら、潰れた桃や玉葱の山の上で毎日売り上げ伝票をコンピュータに打ち込む私の仕事は、立派なコンピュータ関連業務になってしまう。

お世辞も方便、愛想も方便。とはいえ行き着く先は『嘘』なんだと彼らの会話は教えてくれた。

お昼になると、私以外のおばさん2人は奥の湯沸かし場で煮炊きを始める。お湯を沸かしてカップラーメンなどという生易しいものではない。『煮炊き』だ！

慣れないうちは驚いた。バッグ、それも極々普通のハンドバッグに鶏ガラを入れてきて、それをダシに「おじや」を作ったりするのだから。

しかも、ただの鶏ガラではない。「これさー、タベ食べた鶏モモの骨なのー、いいダシが出るんだよー」本来なら、夕飯のあと一歩も家の外へ出ないようなシロモノ。

## さきがけ

---

かと思うと、もう1人はせっせとキュウリを刻んでいる。

持参の“冷やし中華”の具だという。

「夏はやっぱり冷やし中華よね」

ああ、そうですか。

発想の転換・暮らしの知恵おじやと、季節のメニュー・冷やし中華で夏は終わった。

秋になってアルバイトが来た。

私は、このとき初めて一つの言葉の持つ意味の広さを知った。

それまでアルバイトといえば、カタカナ語の持つ言葉の響きから、

漠然と17~18の若いコを指すものと思っていたのだが、64才の彼女を目の当たりにして、

改めてドイツ語の原義“アルバイト=働く”を認識した。

そうだ、アルバイトは「働く」だ！ 働くのに年齢は関係ない。

ついでながら、この人のお昼もすごかった。

「もーねえー、入れ歯の調子が悪くてねー、

歯医者に行ってるもんだから、ロクに噛めないんだー。

それに北海道に嫁にいった娘がもうじきお産だから、来週には行ってやらなきゃなんないし、

歯医者のはうはその間ぜんぜん行かれないから、もういつ新しいのができるかわかんないよー。

しょうがないから、今日は弁当箱にお粥いれてきた。あつためよ」

この気安さは一体何だろうとおののいたが、なんのことはない、昔の職員で、

手が足りないので呼ばれたらしい。

彼女が入って、奥の湯沸かし場は一層の活気を呈した。

これで誰かが洗濯でも始めたら、その雑駁さは完全にゾラの『居酒屋』だ。

が、『居酒屋』よりも構成人員の年齢がずっと高いので、食後はゾラも吹っ飛ばす風景となる。

シンクに散乱したご飯粒、魚の骨、キュウリのヘタ……。

最初は謎のゴミだった。「何だろう？」と思って1週間ほど観察していたら、

入れ歯を外して洗った結果！

毎日続くあまりの惨状に、私は友人にあてて手紙を書いた。

\*こんなことが、私の想像力から出たものだったら、少々気持ちが悪くても、

『へんなこと思いついちゃったー』と笑えるのですが、呆れたことにみんな単なる事実です。\*

## さきがけ

---

そんな中、唯一の友はオフィス・コンピュータで、私は密かにこれを『コーボルト』と名付けていた。昔、どこかで聞いた、仕事を助けてくれる妖精の名前だ。

一瞬、『ハル』もいいなと思ったのだが、市場の上が宇宙ステーションでなく、私がデイクでない以上、無理な設定だと諦めた。

プログラムが組めるわけではないので、ただ淡々とルーチン・ワークをこなすだけだったが、コーボルトのキーボードのタッチや、当時はまだ珍しかった白黒のディスプレイ、ピンクやレモンイエローのフロッピーラベル、プリンターの乾いた「ツィー・ダッダッダッ」という音が好きだった。そして、コーボルトの周りには、かろうじて「アップ・トゥ・デイト」の空気があった。

日付スタンプの数字は『59』、昭和59年で途切れていた。

しかし平均年齢53才の6人全員を呑み込む長い長い昭和はまだ終わる気配を見せず、年末になって、「59. 12. XX」と日付のついた伝票を繰る指の先に、来年はやっぱり昭和60年なんだろうな。スタンプ会社は60年からまた10年分くらいの新しいゴム印を作るのだろうか？

でも、昭和70年なんてものは絶対に来ないだろうから、後半数年分はムダになるわけだ。60年代があと数年で終わるとすると、昭和のゴム印はお払い箱になって、すぐに新しい年号のゴム印が必要になるから、どのみちスタンプ会社はずいぶん儲かるだろうな。などという思いが、たぶたと押し寄せ、いつまでも終わらない昭和へのイラ立ちへと変わっていった。

その頃、アメリカではスペースシャトル=チャレンジャーが発射とともに炎上し、惨事を告げるFENが、もの凄い勢いで頭上を通過していった。

宗教関係の人間が街に溢れ、呼び止められては、「あなたは、なぜスペースシャトルが墜落したのだと思いますか？」と聞かれた。

が、それは私にすれば「あなたは、なぜあの市場の隅っこに腐ったトマトがあるのだと思いますか？」というのと同じ程度の問いだった。腐ったトマトに、今さら神の介入する余地などない。

さらに言えば、「私の職場はなぜジイさんバアさんばかりなのですか？」という問いに行きつき、遂には「私はいつ結婚できるんですか？」とまで聞いてみたくなった。

## さきがけ

---

24才の女にしてみれば、

スペースシャトルが、彼らが言うところの「神のご意志」によって落ちたということよりも、自分が今、“何でここにいるのか？”ということのほうが、よっぽど大きな問題だった。

答えはあらかたわかっていたにせよ、一応は人並みに「大きな問題」だった。

が、そんなことを他人に言ってどうする。

そんなことが気になったら、キャラメルでも食べて、ツバといっしょに飲み込んでしまうのだ。

キャラメルの甘みは、頬にわずかな暖かさを残して力に変わるだろう。

その力で、また何かできるじゃないか。神様に頼っている余裕などない。

「一粒三百メートル！」

このほうが、よっぽど分かりやすく、頼りがいがあるというもの。

始業時間が早いから、冬はまだ空に水月（クラゲ）のような月が残る寒い朝々、駅の売店で雑誌やキャラメルを買い込んで出勤していた。

職場では用の口しかきかず、他の5人にはいつも背を向けていた。

こう書いてみると、どこかもの哀しく響くけれど、

相手との年齢差が天文学的に大きい場合、事情はかなり違ってくる。

実際、用がないのだ。

14人もの人間を一気に余剰人員にしてしまっただけあって、コーボルトはよく働いた。

短時間に目いっぱい仕事を押しつけて、浮かせた時間にひたすら本や雑誌のページを繰っていた。

「魔の山」「赤眼評論」「中世の秋」「中国の古代文学」「中国の錬金術と医術」  
「江戸の暗黒街」「アクロイド殺し」「源氏物語」「塔」「隠された十字架」「神々の流竄」  
「なぜエヴァンズにたのまなかったのか」「下駄の上の卵」「東日流外三郡誌」  
「推背図」「午前零時の玄米パン」「腹鼓記」「吉里吉里人」「週刊文春」「鳩よ！」  
「ブルータス」「クロワッサン」「サンデー毎日」……。

職場でこれほど豊富な読書時間に恵まれたのは、当然ながらこれが最初で最後だ。

本は、時にささやかな不可触領域を作ってくれる。それはコーボルトの操作にも通じていた。

他人と肩をくっつけ、和を守りながらも、

ほんの短い時間にそういった領域を作り出して安らぐことのできる人間がいる。

しかし私は、そういう勤い人間ではなかった。

時間の問題でも、空間の問題でもない。

ひとえに“器”の問題だ。

